

空也と平安知識人

——空也諫と日本往生極樂記弘也伝——

小 林 盛 得

日本仏教史上、なかならず浄土思想展開史の上で、空也の果たした役割は極めて注目すべきものであることは、従来しばしば説かれているところである。併し史料制的な制約等でその究明にはかなりな障害が横たわっている。新史料の発見を見ない現在、この障害を打破するためには現存史料の検討の面で一考すべき余地が残されているのではないかと思われる。

源為憲・慶滋保胤は、共に空也の後半生にほぼ時を同じくして活躍した著名な文人で、いまこの二人の手になる空也伝が各々知られているが、その作成の経緯を明らかにすることによつて空也の周囲を窺見しようとするものである。

一

空也の行業を伝える比較的信憑度の高い史料として挙げられているものは、三善道統の「為空也上人供養金字大般若経願文」

本朝文、源為憲
粹十三

の「空也諫」、慶滋保胤の「日本往生極樂記」のうちの弘也伝と僅か三つのものに過ぎない。^{註1}このうち道統の願文は、応和三年^{九六}三月八月賀茂河岸で空也が行つた経供養の有様、および京都における空也の活躍の一端は知ることができるが、その行業全般にわたつて通観し得るものは後の二史料にまつ外ない。

「空也諫」は序と諫の二部分に分れており、序は諸種の願文・知識文等を編集したもので、長文を綴つてかなり詳細な記述がなされ、諫は四字一句の三十四句からなり、序文の要約である。ただし、長短数十箇所にわたり欠字があつて難読なものとなつて^{註2}いる。この点保胤の「弘也伝」は、往生者四十二人の伝を収めた「日本往生極樂記」の中のものであるので、簡単ではあるが要を得た書き方をしている。この二つの伝を比較して見ると、「極樂記弘也伝」の記事のほとんどの部分が「諫」のそれと重複している点注目を要する。いま煩雑ではあるが、「極樂記弘也伝」をもとに両伝を対照させると次の如くなる。^{註3}

沙門弘也。不言父母。亡命在世。或云。出自漢流。

口常唱彌陀仏。故号阿彌陀聖。

或住市中作仏事。又号市聖。

遇峻路即鐘之。当無橋亦造之。

見無井則堀之。号曰阿彌陀井。

播磨国揖保郡岩合寺有一切経。数年披閱。若有難義者。夢有金人常教之。阿波土佐兩州之間有島。曰湯島矣。人伝。有觀音像靈驗揭焉。刺上人腕上燒香。一七日夜。不動不眠。尊像新放光明。閉目即見。

一鍛冶工。遇於上人。懷金而歸陳曰。日暮路遠。非無怖畏。上人教曰。可念阿彌陀仏。工人中途果遇盜人。心竊念仏如上人言。盜人來見称市聖而去。

又西京有。老尼。大和介伴典職之旧

空也 誄(按粹)

(前略) 上人不顧父母。無說郷土。有識者或云。其先出皇派焉。

(中略) 常時。称南無阿彌陀仏。(中略) 呼為阿彌陀聖。

(中略) 有所得□作仏事(中略) □市聖。

(中略) 若觀道路之峻艱。(中略) 荷鉢以鐘石面。而投杖以決水脈。^{註4}(中略)

(中略) 所無水処鑿井焉。今往々号為阿彌陀井是也。(中略)

播磨国揖保郡有峯合寺□□一切経論。上人注彼教文。義覺後□□果□如夢。阿波土佐兩州海中。有湯島矣。(中略) 伝有觀世音菩薩像。靈驗揭焉。(中略) 腕上燒香一七日夜。不動不眠。(中略) 尊像放微妙光。瞑目即見。不眠無見(中略)

F 西京有。老尼。前大和介從五位上伴

室也。一生念仏上人為師。上人令補綴一衲衣。尼補畢命婢曰。我師今日可遷化。汝早可齋參。婢還陳入滅。尼曾不驚歎。見者奇之。上人遷化之日。著淨衣擎香炉。向西方以端坐。語門弟子曰。多仏菩薩來迎引攝。氣絕之後。猶擎香炉。此時音樂聞空。香氣滿室。嗚呼上人。化緣已尽歸去極樂。天慶以往。道場聚落。修念仏三昧希有也。何況小人愚女多忌之。上人來後。自唱令他唱之。爾後奉世念仏為事。誠是上人化度衆生之力也。

朝臣典職之前妻也。念彌陀仏。一生不退。与上人有情好。(中略) 須□上人衲衣一領令尼縫之。(中略) 令奴婢曰。吾師今日可終。咄汝速授街里。婢婦報以滅度。尼無驚歎。時人大奇。(中略) 入寂之日。浴著淨衣擎香炉向西方以瞑目。当此時也。音樂來自天。異香出自室。(中略) 氣絕猶驚香炉。(後略)

右のように、一鍛冶工が空也の教示により念仏して盜賊からの難を免れた話と、「嗚呼上人化縁已尽云々」と云う保胤の讃を除けば、若干記述に前後するところはあつても、出自・称号・遊行行化・苦修練行・臨終來迎そのすべてにわたり「誄」の記述の中に含まれほとんど変る所がない。このような類似はどうして生じたのであろうか。ここで両伝の成立の経緯を考えてみよう。

「空也誄」が何時頃著わされたかを明示する史料は知られていないが、誄の性質上、或は「国子学生為憲」の署名が見えるところなどから空也の死後遠くない時期と思われる。^{註5} 空也の歿したのは天祿三年^{六七}九月であるが、或はその一周忌供養に際して、即ち天延元年に書かれたものではあるまいか。そして文中「或尋遺弟子於本寺。又集先後所修法会願

文。唱善知識文數十枚。以知平生之蓄懷焉。不堪称歎。而為之誄」とあるように、空也の遺弟子から直接その行業を聞き、また法会願文、善知識文等をもととしてその伝が作られたのである。

一方「極楽記」は、聖徳太子、行基と近日訪得往生人とを除いた三十七、八人の伝が、永観元年から寛和元年の間^{九八三}に先ず撰述され、その後出家して筆を絶つた保胤の依頼を受けた中書王兼明が近日往生人を加え、永延元年^{九八八}兼明の死により、寂心（保胤）再度筆を取り聖徳太子、行基の伝を加えて今日伝わる形が成立したのである。^{註6}弘也伝は最初の三十七、八人の伝の中に数えられるものと思われるが、この伝だけについて特にどのような方法で記されたかを説明する材料は見られないが、「極楽記」の序文のうちに「今検国史及諸人別伝等有異相往生者。兼亦訪於故老。都慮得四十余人」とあつて全般にわたる記述態度を明らかにしている。

こうして見ると「空也誄」と「極楽記弘也伝」との間には十年余の差があり、なお両者に既に融れたような類似があるのは、「極楽記」の中に空也の伝を収載するに当つて、先行する為憲の「空也誄」をいわゆる「諸人別伝」として参照したことを示すものではないだろうか。この観点に立つて「極楽記弘也伝」にのみ記された鍛冶工の話の典拠を「空也誄」の記述に求めると、東郡の囚門に卒都婆を建て、囚徒を教誡している話が見出される。^{註7}念仏を唱える鍛冶工を空也と見誤り危害を加えないで去つた盗賊の態度は、この空也の囚徒への伝導の事実があつて始めて

首肯されてくるのである。一見独立したように見える鍛冶工の記事も「空也誄」参照の説に矛盾するところとはならないと云えよう。^{註8}

註1 歌川学氏「空也と平安仏教」（日本歴史第六十一号）。上記の三史料の外に、空也上人絵詞伝、日本紀略、扶桑略記、元亨釈書、本朝高僧伝、古事談、撰集抄、古今著聞集その他のものが知られているが、いずれも空也の歿後長年月を経過して作られたもので三史料の演繹したものか、信用の置けない説話類である。もちろんその中には三史料を補足するものもある。

註2 「空也誄」の流布本として統群書類従本が知られているがこれには錯簡があり、更に難解なものになっているが、幸い真福寺本によつてこの欠陥は補うことができる。これによれば「北門蛇吞蛙。蛙大破口。……使権律師余慶迎棺槨而訖之訖。以火燒。送喪之者。慨然变色。」の部分分が空也臨終の記事の少し前の「康保末年」と「西京有一老尼云々」との間に入る。

註3 「日本往生極楽記弘也伝」は大日本仏教全書本、「空也誄」は統群書類従本を使用。「空也誄」の、比較に不要な部分は（ ）で略したが、「極楽記」の記述順序にしたがつた為「空也誄」の記述順序は前後する場合がある。アルファベット（A-F）で示したものが「誄」の順序。

註4 「六波羅蜜寺縁起」（古写本）中に「空也誄」を引用した箇所があり、流布本の欠を多少補うことができるがこの部分は、「荷鍾以鐘巖石。臨渠之於泥水以亘橋梁」とある。

註5 天祿三年八月に行われたいわゆる天祿歌合の序文を為憲が書いているが、これに「学頭ためつね」（ためのりの誤り、順集には「学生ためのり」とあり）、また貞元二年（九七七）閏七月二十三日の日本紀略の記載によればこの時既に内記になっているので下限は少くとも貞元二年である。

註6 菊池勇次郎氏「日本往生極楽記の撰述」（歴史教育第五卷六号）

註7 「其年。東郡囚門。建窆堵婆一基。尊像眩曜兮満月。宝鐸鏗鏘兮鳴風。若干囚徒。皆垂淚曰。不図瞻尊容瞻法音。善哉得拔苦之因焉」

註8 なお「空也諫」は、「極楽記弘也伝」との重複部の外に神泉苑老狐との交渉、造仏写経等の供養、叡山での受戒、蛇の折伏、藤原師氏との交友等の記述をもつ。これ等のはほとんどは順序としてはEとFの間に含まれる。

二

ここで角度を変えて二人が空也伝を書くに至った事情を、三者の生活および相互の交渉のうちから考えて見よう。

源為憲は光孝源氏の流、筑前守従五位上忠幹の子として承平の末頃九三一^一生れたが、空也はこの時三十代であつた。官歴は、文章生、藏人、式部丞から三河権守、遠江、美濃、伊賀の国司を歴任し、位は従五位下が極位、伊賀在任中の寛弘八年一一〇八月没している。美濃在任の長保元年九九、或る殺人事件に連坐して釐務を解かれようとしたことがあつたが、同国百姓が為憲の治績を挙げて留任の嘆願をしている事実^{註2}や、遠江国司を望んだ状に自ら業績を具体的に披歴したり、また既にその任を終えた藤原行成に対して、同人の任期中に起つたことであるからと蔵人所の召絹の量目について調査を依頼している等^{註4}から見て、かなりの良吏であつたことが知られる。こうした一方、源順に師事し、同門橋正通とその門の一二を競い才名を馳せ、詩会等に臨んでは詩藝と称する袋をたずさえ、好句を聴いては感泣したと伝えられるような感激性を示すこととさえある。

このように官位の面も、また学問文芸の上でもそれほど不遇ではな

つたらしい為憲が、空也に私淑したことを示す徴証は見出し難いが、ただ永観二年九八^四冷泉院の二女、尊子内親王の道心をすすめる為に著わした「三宝絵」の下巻序中に、宗旨の有り方、僧の行いについて述べている箇所があるが、「或は世間にいでて人の心をすすむ^{註6}」とあり、世間の済度を主とした僧の行為を称賛しているが、恐らく空也等の行業を想い浮べての言葉であらう。また同じく上巻序に「若くして文の道に遊一枝の桂をば折てき。老て法の門に入りて九の品の運ずを願ふ」の語があり、浄土への思慕を示している。このように、彼のうちに浄土思想を見ることができ、^{註7}「三宝絵」全体の構成から考えれば天台宗への帰依の方が、より濃いものがあると云える。例えば、下巻の諸寺法会行事の書き方でも叡山関係の比重が圧倒的に大きいこと、また引用經典に天台宗関係の經典のものがかなりなスペースをとっていること、更には「法華経賦」などの著作が彼にあることを見れば、天台法華宗がその基調になつていることは疑いもない。勿論この時代の貴族達の信仰の主流がこの宗^{註8}にあり、多分に教養化さえしている状態にあつたから、そうした趨勢に沿つたものと見ることが出来る。為憲の信仰はこうした天台宗の、即ち「法華経」の思想に基づいた上での浄土思想を内容とするもので、これもまた、この期浄土思想の一般的傾向なのである。^{註9}

なお、保胤等が首唱し結成されたい念仏結社のグループ勸学会の参加者に為憲が擬せられているが、これは彼が「三宝絵」下巻で、当時盛んに行われた諸寺の法会の模様を述べた中にこの会を取り上げている

ことによるものである。たしかにこの条は、勸学会を詳細に伝えるとともに、「娑婆世界はこゝ多仏事をなしければ僧の妙なる偈頌をとなへ、俗のたふとき詩句を誦するをきくに、心おのづからうごきて、なみだ袖をうらほす」^{註10}と主観的な描写をしており、このような描写は他の三十条の法会のどこにも見られない。また、紀齊名の「勸学会詩序」に対する為憲の評言も知られている。^{註11}したがって、康保元年^{九六}から寛和二年^{九八}にかけて、法華講読と詩会と阿弥陀念仏を内容とする、いわゆる第一期勸学会の会衆に為憲を加えることができる、と思われる。

以上、空也との関連を求めて為憲の浄土思想について考えてきたのであるが、彼の場合、保胤が抱いたほど強烈なものではなかったことは、保胤が出家してまで浄土を求めたのに対し、終生在官していた点を見ても明らかである。

この期浄土教発達の思想的基盤として、律令制的身分制度と律令的土地制度とが、荘園制の発達により崩壊をきたし、一面に摂関家一門に富と権力の独占をもたらし、他面一般貴族生活の逼迫を強いる結果となり、この層の批判的意識を昂めた点が指摘されているが、この批判的意識についても両者の差ははつきりしている。安和の変の源高明左遷について、高明と無縁な保胤が「往年有一東閣。華堂朱戸。竹樹泉石。誠是象外之勝地也。主人有事左転。屋舎有火自焼。其門客之居近地者数十家。相率而去。其後主人雖婦。而不重修。子孫雖多。而不永住。荆棘鎌門。狐狸安穴。夫如此者」^{註13}と述べ高明の周囲に鋭い視線を投げているの

に、為憲は彼の師順の血統きで、且つ師と親交のあつた高明のこの事件にはほとんど反応を見せていないのである。或はその豊かな文才による権門の被護が時代の矛盾に向ける批判の目を覆っていたのかも知れない。

註1 源為憲の伝については故岡田希雄氏の研究（「源為憲伝攷」国語と国文学昭和十七年一月）があるが以下の記述はこれによるところが大きい。氏は三宝絵序文中にある「老いて法の門に入りて」の語から、三宝絵の著わされた永観三年を一応四十才とし、これから逆算して承平五年頃を生誕としている。

註2 権記、長保二年二月二十二日条

註3 請被殊蒙天恩依遠江国所济功并成業勞拜任美濃加賀等国守關状（本朝文粹六）

註4 権記、長保四年三月二十六日条

註5 江談抄四

註6 あな、たふと、或は経論を説てながくのりの燈をかゝげ、或は戒律をまもりて鉢の油をかたぶけず、或は眞言をつたへてまたくかめの水をうつし、或は大乗を誦してあまねく衣のうらに玉をかけ、或は禪定をこのみて世のいそぎをすて、或は世間にいてゝ人の心をすゝむ。みなこれ仏教のあまたの門よりわかれいでゝ、おなじく菩提の一所にいたりあはむとする也（三宝絵略注、山田孝雄氏、宝文館、以下引用文は同書）

註7 山田孝雄氏「三宝絵詞の研究」（前掲書）

註8 俗慈弘「日本仏教の開展とその基調」（上）

註9 菊地勇次郎氏「日本往生極楽記の選述」

註10 三宝絵下巻

註11 齊名勸学会序事（江談抄六）

註12 井上光貞氏「日本浄土教成立史の研究」第二章第一節天台浄土教と貴族社会（山川出版）

註13 池亭記（本朝文粹十二）

前節で見たとおり、為憲の浄土思想は必ずしも強固なものと云えず、空也との交渉も確認するまでに至らず、この範囲では彼の側から「空也誄」を著わした必然的契機は求められない。慶滋保胤の場合はどうだったのだろう。

為憲とはほぼ同じ頃生れた保胤は、かなり熱心な浄土思想の持ち主で、彼自身幼少の頃から仏道に心を寄せたと述べているが、それが顕著に見られるのは、壮年期の天延頃^三からで、先ず勧学会の成立とその指導と云う念仏結社運動の実践を計り、やがて「日本往生極楽記」著述に見られる理論的活動、更に寛和二年^六出家と求道一筋にその後半生を飾るのである。^{註1}

既に保胤の「極楽記弘也伝」が、為憲の「空也誄」を参照して書かれたものであることを述べたが、先の比較によつても、「弘也伝」末部の「嗚呼上人。化縁已尽云々」の語が、保胤自身の評語であることは明らかである。この評語に見られる主観の強さについては、菊地勇次郎氏も指摘しているところであるが、^{註2}「極楽記」中の他の四十一人そのほとんどが臨終時の描写で筆を止めており、このような評語が見られないことにも注意を要する。また、その文中「天慶以往。道場聚落。念仏三昧希有也。……上人米後。自唱令他之。爾後举世念仏事」と「天慶」なる年次を挙げているのは何故だろう。空也は延喜三年^{九〇}の生れである

からこの時三十代、保胤、為憲は十歳に満たない。廿余歳の時、尾張国分寺で自度しているが、その時から数えて十年余も求道と布教にいそんでいる筈である。この天慶なる年次を空也の行業の上から見ると、彼が京都に姿を現わした時で、^{註3}都市民はこの時から彼の教を親しく聞くことができたのである。彼が「五幾七道」の遊歴から都市伝導への転換を計った因については明らかではないが、歌川氏も述べられたように^{註4}恐らく外的には承平天慶の乱等に顕著に見られる地方争乱の禍を避け、併せて彼の地方民衆布教の成果の上に立つ、より広範囲な伝導基盤を都市に求めたものではなからうか。

空也宗教の性格は狂燥的な民間呪術宗教的性格と云われるが、それは多く天慶以前の地方一般民衆布教の場合を指したものであつて、この層への布教はそうした性格をとらざるを得ないのであり、都市への、特に貴族層への布教を目指した天慶以後は、これと異つた性格を附加してゐるのは当然と云えよう。試みに天慶以降の活動を見ると、

天慶元年 ^{九三}	入京、市中に布教を始む
天慶七年 ^{九九} 夏	観音三十三身・阿弥陀浄土変一鋪を供養
天曆二年 ^{一〇〇四} 四月	叡山に登り、座主延昌より受戒
天曆四年 ^{一〇〇六}	紺紙金字大般若経書写を企つ
天曆五年 ^{一〇〇七}	一丈金色観音、梵天、帝釈、四天王像造る
応和三年 ^{一〇一六} 八月	加茂河岸にて紺紙金字大般若経供養。西光寺創建 ^{註6}

康保末年

蛇を折伏

天祿元年^{九七}

藤原師氏の為に牒状を書く。

天祿三年^{九七}

東山西光寺に没。

となり、この間易行易修の口称念仏を唱え市聖、阿弥陀聖の名を得、東西二京に井戸を掘り、卒都婆等而建て四人の教化などを行つてゐる。こにも、民間呪術的布教が見られるが、それよりきわだつてゐるのは造像写経等の供養であり、これは天慶以前にはまつたく見られないところである。東西二京の井戸を掘るなど相変らず社会事業を企てて方便したり、呪術的な布教を行つたりするのは別に、造仏造経供養に半銭一粒を寄捨することにより、都市民の知識結縁を期待したのである。^{註七}それと共に天曆二年叡山の座主延昌より戒を受け、即ち天台宗と手を結ぶことによつて、いわゆる『法華と念仏』の共存の形をとつた浄土思想の普及を、貴族層に計つたのである。天慶元年空也京都に現わると云つても、これには、この新しい布教分野に対して右のような用意がなされていたのである。このような空也に「堂舎塔廟有弥陀像。有浄土図者。莫不敬礼。道俗男女。有志極案。有願往生者。莫不結縁。經論疏記説其功德。述其因縁者。莫不披閱^{註八}」と述べ、また念仏結社の唱首である保胤が強い関心を示したことは当然と云えよう。したがつて、「天慶以往云々」なる表現は、保胤の親しく見聞するところによつたものと云える。両者の交友が何時頃始まつたものであるか明らかではないが、「永修此会。世世生生。見阿弥陀^{註九}」と云つてゐる勧学会の結会時である康保頃まで

は遡れるであらう。この時保胤三十代、空也が六十を過ぎた頃である。

保胤等貴族層への空也の布教がかなりの成功を収めたらしいことは、その周囲に藤原忠平の子大納言師氏、三善清行の息浄藏、善秀才三善道統、伴典職の前妻などの人々^{註一〇}が見えることで明らかであるが、この外に勧学会会衆を加へ得るのではなからうか。その理由として、勧学会は云うまでもなく法華講読、詩会を行いながら弥陀を念ずる、強弱の差はあつても浄土を思慕する人々の集りであり、その主導者の一人である保胤と空也との親交も推測されるところであるから。また六波羅蜜寺における結縁供花会的方式が勧学会に似た昼の法華講読と夜半の念仏の形をとつており、この行事は空也の行業と切り離せぬものであるところを考えれば、勧学会の『法華と念仏』は結縁供花会を通じて空也の行業に通ずると云える。^{註一一}更に後のいわゆる第三期の勧学会の会所としてこの寺が定められてゐるところを見れば、^{註一二}定所を持たず点々と東山の地に会所を換えざるを得なかつた保胤等の第一期勧学会の開催場所として幾度びかはこの寺が選ばれたのではないかと推測されてくる。

こうした勧学会を通じて保胤と為憲は交友関係にあつた外、応和三年^{九七}三善道統宅の詩合に座を連ねてゐるし、^{註一三}冷泉院第二皇女尊子内親王のために為憲が「三宝絵」を著わしたのに対し、保胤はその四十九日願文を作つてゐる。^{註一四}加えて両者の著作が等しく源信の手によつて宋に送られるなど、^{註一五}ほぼ同年輩のこの二人は、学問、宗教等多岐にわたつて親密な交はりを結んでいたのであらう。

註1 拙稿「撰関期における浄土思想の一考察」(書陵部紀要第六号)

註2 前掲書

註3 元亨釈書十四。六波羅蜜寺縁起。

註4 前掲書

註5 井上氏前掲書第二章第一節註(頁一二〇)

註6 四光寺、後に改名して六波羅蜜寺となるこの寺の創建については別な機会に論じたいが、応和三年の経供養と大きな関連がありこの時を以て創建とし、後貞元二年(九七七)頃改名したのではないかと考えている。

註7 「市中泥身。雖在我願。人間催信。既寄群縁。半銭所施。一粒所捨。漸合力。微徵成功」(為空也上人供養金字大般若経願文・本朝文粹十三)

註8 日本往生極楽記序。

註9 勧学会所。欲被故人党結同心合力。建立堂舍状(本朝文粹十三)

註10 道統については空也の為に経供養願文を書いていることから知ることができ、その他の人々については空也誄に見える。なお大納言師成とあるが師氏の誤りであろう。

註11 菊地氏前掲書。なおこの会の模様は保胤の賦によつて知られるのであるが、その中に「緇素相語曰。世有勧学会。又有極楽会」(本朝文粹十)と見えて、関連性を示している。

註12 勧学会の詳細な研究には桃裕行氏「上代学制の研究」(日黒書店)があるからこれを参照されたい。六波羅蜜寺が定所になるのは承暦四年(一一八〇)以降。

註13 善秀才宅詩合。

註14 為二品長公主四十九日御願文(本朝文粹十四)

註15 「当今刻念極楽界。皈依「法華経」者熾盛焉。……………又先師故慈恵大僧正。諱良源。作「観音讃」。著作即。慶保胤。作「十六相讃」。及「日本往生伝」前進上為憲。作「法華経賦」。同亦贈欲令知異域之有此志」往生要集末文(花山信勝氏校註・小山書店)

む す び

以上の点を総合すると、空也の死によつて大きな衝撃を受けたのは為憲よりもむしろ保胤であり、彼が企てた往生伝の著述の中に空也伝が収められ、特別な配慮が払われているのは当然のことと云える。ただ、その死によつて最先に筆をとるべき筈の保胤が、実際にはそれほど関心を示しはしなかつた為憲の手になる「空也誄」を基にしてその伝を著わしていることは如何に解されるのだろうか。この間の事情を明らかにするのが、空也と勧学会会衆との結びつきである。空也の死の影響は、強弱の差こそあれこれら浄土を思慕する知識人達にとつて共通のものがあつたと云えよう。その誄の書き手は当然このグループから選ばれて然るべき状況にあつた訳で、文才の点ではいづれ劣らぬ人々であつたから、その中から誰がこれに当つてもよかつた。併し既に「口遊」を著わし、後年の「三宝絵」、「世俗諺文」等特定の人に対し特殊な目的を持つ編著に豊かな才能を示すその兆を見ている為憲が、この時まだ行動的な、実践運動を指導する型の念仏信者で、筆を執りこうした述作にたずさわる時期はしばらく後であつた保胤等の推すところにより選出されたものではなからうか。結果論から云えばその際の人選は必ずしも当を得たものではなかつた。大江以言の「空也聖人甚見苦物也。非誄是之伝也」^{江談抄六}の非難が何を指したものであるか明らかではないが、その伝がかなり長文にわたり一応詳細に記述されているが、その編纂には何処か一貫性を欠

く所がある。これは彼の浄土思想の弱さからくる空也像把握の不正確さによるものかも知れない。このような欠があつたにしても「空也諫」は、云わばこの期念仏思想を抱く知識人の所産であつたのである。後年、保胤が彼自身の内なる要請にしたがつて往生伝を著わすにあたつて、かつて彼等自身の所産であつた「空也諫」が先ず念頭に浮んでくるのは当然のことであつたらう。その際、往生者の伝としての内容、体裁と簡明な記述を必要とした保胤にとつて、為憲の文の書き替は余儀ないものであつた。このような経緯で「空也諫」の参照、抜粋がなされたのではなからうか。

空也に関する根本史料として挙げられた「空也諫」と「日本往生極楽記弘也伝」の二つは右のように、後者の保胤の讃を除いた部分は、実は前者に包含されたものなのであり、この点から空也研究の根本史料は為憲の「空也諫」が唯一と云うことになる。ただこう云つても注意しなければならぬのは保胤の讃部の持つ意義で、この部分こそ空也の教えに共鳴した保胤の空也観を示す重要な史料であり、また空也像の適確な描写でもあることである。

釈慶政略伝

〔一〕

九条良経の男、光明峯寺関白道家の兄。文治五年^{八九}誕生、幼時の事故により不具となり仏門に入つたという。文永五年^{一一二}十月六日入寂、時に八十歳^{猪熊本}比良山人靈託記^{勘注}。

証（又は勝・照）月房と号し、園城寺の僧で三井の密行をうけ^{三井統隆}、^{寺伝}法灌、かねて東密をも伝えたりしい^{東寺真}。建保頃^{建保七}以前^一入

宋、福州版「大方広仏華嚴經」^{書陵部}以下^部の諸經典・仏像等を招来した。そのうち山城国西山松尾に草庵を結び、法隆寺舍利殿の造営^{建保七}など

堂塔の修治に力をつくし、晩年法華山寺等を創立した。

「比良山人靈託」・「漂到流球国記」・「関寺観音堂縁起並笠置寺事」

書陵部蔵 九条家本

著者にも擬せられ、そのほか往生伝・諸寺縁起類等の書写が知られている。また九条嫡流の出自のためか法友歌友甚だ多く、九条道家・教実の

二代は勿論、時の権門との贈答が多い。歌は続古今集以下の勅撰集に十九首、また万代・秋風・夫木の各私撰集に十一首を数えている。釈門歌人ともいふべきであろう。

〔猪熊比良山人靈託記〕 勘注

〔道家〕

証月上人ノ名、峯殿兄ナリ、乳子取落ニ依テ背骨出ル故ニ釈門ニ入ル、一音院法華山寺字峯ノ堂等ノ祖師

〔書陵部本〕大方広仏華嚴經〔版心〕

日本国僧慶捨、日本国僧慶政捨

九条家本慶政筆奥書集

〔法華山寺縁起〕

〔安貞元〕

丁亥歳八月十一日 砂門福聚金剛

（七八頁へ続く）